

朝礼での校長講話を考える

The Principal's Lecture at the Morning Assembly

石鍋 浩

ISHINABE Hiroshi

要 約

全国の学校で行われている朝礼（朝会と称する場合もある）では、その中心として校長による講話が行われる。校長による授業とも言える朝礼講話であるが、それはどのようなねらいでどのような内容が話されるのかについて、私が実際に行った講話をもとに考えていくことにする。

1. はじめに

全国どの学校においても朝礼（朝会と称する場合もある）が行われている。朝礼を毎週実施する学校もあれば、隔週で実施する学校、月に1回程度の学校もある。いずれの場合でも、朝礼の中心となるのは校長の講話である。同窓会やクラス会、テレビのバラエティ番組などで語られる朝礼での校長講話については、「話が長くてつまらなかった。」「全く覚えていない。」「貧血で倒れる生徒がいた。」などであり、好意的に語られることはさほど多くない。

私は10年間の校長経験の中で150回以上の講話を行ってきた。当時の生徒たちにどのように受け止められていたかはわからないが、少しでも生徒に聞いてもらえるような内容にしたいと常に考えていたことを思い出す。題材はあらゆるところに転がっている。出勤途中の電車の中、学校や自宅のまわり、テレビ番組、教職員や保護者との会話、新聞記事、本、映画、音楽、先輩校長の講話等々。題材選びは、私自身を成長させてくれたと思っている。日常の身のまわりの出来事などを意識して見ようとするようになり、たわいのないものと思っていた事柄で

あっても生活にとって必要なものと感じることができるようになった。今までとは違う方向から物事を見ることができるようになったことも大きい。本稿では、朝礼における校長講話は、どのような意図をもって行われるものなのか、また、各講話はどのようなねらいで具体的にはどのような内容が話されるのかについて、私が実際に行った講話をもとに考えていくことにする。

2. 校長講話で大切にしたこと

私は、次のような点を大切にして校長講話を行ってきた。どの校長先生方もほぼ同じような意識であると思うが、とても重要と思うのであえて記すことにする。

- (1) 校長講話は、「校長による授業」であるという意識をもつ。
⇒当然であるがしっかりとしたねらいをもった講話を心がける。
- (2) 校長講話の基本は、生徒への動機付けと励ましとする。
⇒生徒がやる気になり前向きになれる内容を心がける。

- (3) 伝えたいメッセージを明確にする。
⇒伝えたいことをできる限り具体的に表現する。
- (4) 生徒たちにもわかりやすい言葉で語る。
⇒難しい言葉は極力避け、難しい言葉を使うときは補足説明を加える。
- (5) 一方的に話すのではなく生徒へのやり取りを意識する。
⇒生徒へ投げかける言葉を入れるようにする。
- (6) 登壇から降壇まで5分で収める。
⇒いくら良い話をしていても長ければ生徒はそれで聞かなくなってしまう。
- (7) 話すスピード、抑揚、間を意識する。
⇒生徒を引きつけるためには話し方の工夫はとても重要。講話の事前練習をする。
- (8) 必要な場合は、視聴覚機器や絵カード、写真等を活用する。
⇒理解をしやすくするために視覚に訴えることはとても重要。

少し視点を変えて次のようなことも意識した。

- (9) 生徒の健康状態を観察する。
⇒朝礼では体調不良を起こす生徒がいる。話しながらできる限り多くの生徒の様子を確認し、体調不良の生徒を発見すれば講話を中断してすぐに声かけをする。
- (10) 校長講話の内容は、教職員へのメッセージでもあるという意識をもつ。
⇒講話の内容は「こんなことをしてほしい」「これが大切だ」という校長から教職員へのメッセージでもある。

3. 校長講話の実際

私が行ってきた150以上の校長講話の中から8点を紹介する。この8点は、特別な題材を選んで多くの時間を割いて練りに練ってつくりあげた講話では

ない。私の校長経験の順に選んだだけである。まさに、ふだんのものなので、読まれた校長先生方が何らかのヒントにしやすいのではないかと思う。

(1) 平成21年12月7日(足立区立新田中学校)

《テーマ》ボランティア活動

《講話のねらい》

ボランティア活動は、恵まれない気の毒な人のために行う奉仕・慈善活動と考える生徒も少なくない。そこで、前日に実施された本校の伝統行事である「もちつき大会」を振り返りながら、「ボランティア活動」とは何なのかを考えさせたい。本校の「もちつき大会」は、生徒たちがPTAの方々と一緒にもちをつき、ついたもちにあんこやきな粉、しょうゆなどをまぶして、招待した地域の方々にするまうというものである。そこで、実際に実施したばかりの「もちつき大会」をきっかけに、自分から「何かをやりたい!」という主体的な気持ちが出てくること期待したい。

【講話】

昨日の「もちつき大会」ご苦労様でした。町のお年寄りが本当に喜んでくれました。

いくつか、お年寄りから頂いた言葉を紹介します。

*感想のいくつかを紹介する。

今日は、昨日のことに絡めながら、「ボランティア」について考えてみましょう。ボランティアという言葉を知るとどんなことを思い出しますか? 「地震や洪水などの被災地へ出向いての活動」「困っている人に無償で何かをしてあげること」「時間のあまる人がやること」など、このように特別の活動だと思いませんか?

ボランティア活動は、恵まれない気の毒な人のために行う奉仕・慈善活動というとらえをして「～してあげる」という気持ちを強くもっていた人も多と思います。しかし、ボランティアは、決して「～してあげる」活動ではありません。この地球に共に

暮らす仲間としての「協力者」という意味があるのです。かわいそうだからという気持ちで行うことではありません。友達や仲間のような気持ちでお手伝いすることが大切なのです。

皆さんには、昨日の「もちつき大会」を、ぜひボランティアの入口にしてほしいと思います。昨日の活動で、自分から「何かをやりたい!」という主体的な気持ちが出てきて、何らかの活動につながっていくことがあれば、それは素晴らしいことです。それは「自分のできることをして自分自身を向上させる」ことにもつながるのです。

人がだれでももっているやさしさや思いやりを、周囲の人や生物、自然や環境のために役立つことをすれば、自分自身のためにもなりますね。

何ごとも、行動に移す「はじめの一步」が大切です。昨日の「もちつき大会」を自分たちから何かを始める第一歩にしてください。

(2) 平成 22 年 5 月 24 日 (小中一貫校 足立区新田学園)

《テーマ》自律

《講話のねらい》

修学旅行での 9 年生 (中学 3 年生) の自律的な行動が行事を成功に導いたという内容を紹介し、自律の大切さを伝えるとともに、後輩の児童生徒たちにも先輩を目標に自分を律することができる人間に成長してほしいと伝えたい。

【講話】

先週の月曜日から、9 年生と一緒に京都・奈良へ修学旅行に行ってきました。京都・奈良は、日本の伝統・歴史があふれていてとても素晴らしかったのは言うまでもありません。

しかし、今日は、その話ではなく、修学旅行での 9 年生の頑張り、素晴らしさを話します。新田学園のファーストリーダー (小中一貫校最初の最高学年) の姿から多くを学んでください。

まずは、時間を守った行動が、ほとんどの人がで

きていました。朝は、東京駅に集合でしたが、予定よりも 20 分くらい早く集合が完了していました。また、3 日間をとおして、ほとんどの行動で 5 分前行動ができていました。(5 分前行動とは、7 時から食事というスケジュールであれば、5 分前には皆がそろっているということです。) そのため、ほとんどのスケジュールを順調にこなすことができました。

また、班行動が多いのですが、男女よくまとまって、協力して行動していたため、時間どおりに班行動ができました。京都など、初めての場所で、自分たちの力だけで場所を回るわけなので、迷ってしまった班もありましたが、そのようなときには、きちんと電話連絡をし、次の対応をしっかりとすることができました。

ちょっとした失敗もなかったわけではありません。持って行ってはいけないものを持って行った人もいました。先生方が指導すると、自ら反省し自分から名乗り出てくれました。失敗はしてしまいましたが、その後の反省がきちんとできていたため、次の成長につながったと思います。

修学旅行が成功した主な理由として、次のことがあげられます。①きちんとした事前の準備があった。②自分たちで協力した。③自分たちでしっかりと先を考え判断した。④自分を律することができた (律する = ある基準、ルールなどによって、自分たちで物事を考えたり処理すること)。

新田学園生、自分自身を律する人に成長してほしいと思います。

(3) 平成 23 年 6 月 5 日 (小中一貫校 足立区新田学園)

《テーマ》努力

《講話のねらい》

日々コツコツと努力することは、わかっているもなかなかできない。しかし、努力なくしては物事の達成や成功はない。子どもたちにとってあこがれの

存在であるスポーツ選手が、「努力を続けること」が何よりも重要であると言っているインタビューの内容を伝えることで、努力することは誰にとっても当然のことであり、大切なことであるということに気付かせたい。そして、自分もがんばってみようと前向きに考えたり行動したりする姿勢に結び付けたい。

【講話】

これから、あるスポーツ選手の写真を見せます。

*長友佑都（ながともゆうと）選手がサッカーをしている写真を見せながら

君たちは、この選手を知っていますか。知っている人がたくさんいますね。サッカー日本代表選手である長友佑都選手です。今、長友選手は、世界最高リーグと言われているイタリアのプロサッカーリーグ、セリエA（アー）、中でも最高のチームのひとつと言われているインテルというチームで活躍しています。長友選手は、身長が約170cm、体重約65kg、つまり、私より一回り大きいくらいの体格なのです。皆さんも知っているとおおり、プロのサッカー選手は180cmを優に超える選手がほとんどで、長友選手はプロの中では本当に小さな選手であるといえます。

では、その小さな長友選手は、いったいどのようなにして、世界のトップレベルの選手になれたのでしょうか。それは決して平たんな道ではありませんでした。彼は、大学時代、サッカー部に所属していたのですが、入部して間もなく病気などを患ってしまいました。そのため、試合には全く出られず、スタンドで応援する日々が続いたそうです。そのとき彼は、サッカーができないこと、試合に出られないことから、ストレスがたかさんたまり、やる気を失ってしまいました。そして、遊んでばかりいた日々が続いていたそうです。

そんな長友選手を救ってくれた人たちがいます。それは、家族や大学の仲間です。彼の家族や仲間は、遊んでばかりいた長友選手を叱咤激励（大声で

励ましたり、大声でしかったりすること）したそうです。それをきっかけにして、長友選手は、もう一度頑張ろうと心に決めたそうです。その後、彼は立ち直り、JリーグのFC東京の一員としてプロデビューをし、その後、イタリアに渡って、今の素晴らしい活躍へとつながっていくのです。

その長友選手が、次のような言葉を言っています。それは、「僕にはサッカーの才能はないが、努力を続ける才能は誰にも負けたくない。」という言葉です。世界最高の舞台で活躍する選手が、「僕にはサッカーの才能がない。だから毎日毎日努力を続けるんだ。努力を積み重ねる才能はだれにも負けたくない。」と言っているのです。この彼の言葉から、彼は壁を乗り越えるために、そして壁を乗り越えた後も、毎日毎日すごい努力を積み重ねて、今の素晴らしい活躍につながっていることがわかります。

君たちも「努力」という言葉をよく使うと思います。運動会を成功させるために努力をする、合唱コンクールで優勝するために努力をする、部活の試合に勝つために努力をするなどです。そして、その努力が実って結果が出たこともあるでしょう。努力したけれども結果につながらなかったこともあるでしょう。時には、努力を途中でやめてしまって後悔したこともあるでしょう。皆、人間ですからうまくいくときもそうでないときもあります。しかし、長友選手のような超一流選手であっても日々努力を続けているのです。努力を続けることは誰にも負けたくないと言っているのです。君たちも、日々目標に向かって「努力」を続けていってください。スポーツでも音楽でも勉強でも同じことです。次の学校行事も同じことです。君たちの「努力をする才能」がいろいろな場面で花開くことを期待しています。

(4) 平成25年11月25日（足立区立蒲原中学校）

《テーマ》人権学習（何気ない言葉）

《講話のねらい》

中学生の頃は、友達に対して軽く「死ね」「うざ

い」「消えろ」などの言葉を発してしまうことがある。最近ではLineなどのSNSを使ってこのような言葉を投げかけてしまうこともある。自分ではほんの軽い気持ちで言ったり送信したりしたのかもしれないが、言われた相手にとってはひどく心が傷つき、場合によっては自殺や不登校に結び付いてしまうことがある。この講話と講話後に配布する資料を通して「何気ない言葉」であっても人を傷つけてしまうことがあるということをじっくりと考えさせたい。

【講話】

今週は、今年度2回目の人権学習週間です。これからお話をしますが、話が終わった後は、学級に戻って私の話についてしっかりと考えてもらいます。

3~4か月前のことなのですが、亀有駅でのちょっとした出来事です。私は、この日は朝から出張で、亀有駅から電車に乗ろうとしていました。朝のラッシュ時ですから、皆さん急いでいます。私もその一人で、階段を急ぎ足で登っていました。すると、後ろから階段を駆け足で登ってきたサラリーマンらしき若い男性がいました。彼が私を追い抜くときに、彼のカバンが私の体にぶつかってしまいました。痛みを感じるようなぶつかり方ではなかったので、私はそれほど気にも留めませんでした。すると彼は、私の横で一言…「うざっ」と言って電車に乗り込んでいきました。私は、一瞬、耳を疑いました。そして、何とも言い表せない嫌～な気持ちが心に残りました。その日は一日中、嫌な気持ちが続いたことを今でもはっきりと覚えています。

最近、先生方から私や副校長先生に次のような報告が何度もあります。1年、2年、3年、どの学年も君たちの言葉についてです。Aという生徒が、Bという生徒に「死ね」と言った。他の生徒は「うざい、きもい」と言った。また、嫌がるあだ名や嫌がる呼び名を言っている。LINEで「だれだれはうざい」と書いている。そのため、言われた生徒の気持

ちを考える大切さを含め、指導したところですが、などという報告です。

ここにいる君たちは全員が「人の心を傷つける言葉を投げかけることは悪いことである」ということを知っているはずですが。ちょっとした軽いノリで言ってしまった言葉であっても、「言われた方の心は大きく傷つく」ことも知っているはずですが。それにもかかわらず、一部の生徒が、先ほど言ったような他人が嫌がる言葉を言ったり、心が傷つく呼び名で言ったりしていることは、残念です。今日は、人権週間の初日です。ここにいるすべての人が安心して生活できる蒲原中にするために、これから配る資料を使って、じっくりと考えてみましょう。

*資料「何気ない言葉」を配布、範読

(5) 平成27年1月19日(足立区立蒲原中学校)

《テーマ》責任の自覚(多くの人に良い影響を与えよう)

《講話のねらい》

本校生徒の日々の行動が多くの人たちに好影響を与えているという例(生徒のアイデアによるあいさつ運動、朝の自習時間の真剣な取組、授業中の真剣な姿勢など)をあげ、日々行動に自信をもたせるとともに、その行動には責任が伴うということを実感させたい。

【講話】

今、正門であいさつ運動をしてくれている人たちがポスターを手を持って活動していることを知っていますか?

2年生の学級委員は「あいさつを返そう」という手作りポスターをもって毎日あいさつ運動をしてくれています。中学生消防隊は、「消防隊員募集」のポスターを持って来ていました。自分たちで新しい方法でPRする活動は、とても素晴らしい活動です。今年の初めの全校集会で話をした今年目標「自分で考え、判断し、行動できる蒲原中生」にぴったり当てはまります。このような活動をこれか

らも広げていきましょう。

また、先週の火曜日にこの4月から先生になる予定の人たち、つまり「先生のみこ」7名が、元校長先生2名とともに蒲原中にやってきました。授業や休み時間に顔を合わせた人もたくさんいることでしょう。学校だよりも書いてありましたが、先生のみこ7名は、全員が高校の教員を希望していました。しかし、君たちと1日過ごした結果、まとめの会で、なんと7名全員が「中学校の先生になってもよい」という気持ちが出てきたと答えてくれました。

それはなぜかと理由を尋ねたところ、「朝からさわやかに、とても素直な雰囲気です学校生活を送っている中学生と一緒に働いてみたい」「廊下で会っても明るく挨拶をしてくれる中学生はすばらしい」「授業を真剣に受けている姿がよい」「特に、3年生の朝の学びタイムの自習態度はびっくりするほど真剣だった。ぜひ、彼らの力になりたい。」等々と答えてくれました。ひょっとすると、君たちとの出会いが先生のみこたちの今後を大きく変えるかもしれません。中学生の力は、大人の心を大きく変えることができるのです。君たちの真剣な姿は、他人の人生に大きく影響を与えることができるのです。ですから、同時に君たちの行動にはそれだけの責任が伴うということも自覚しなければなりませんね。何気ない態度や行動であっても、他人はよく見ています。影響を与えます。多くの人に良い影響を与えることができる蒲原中生になってください。

(6) 平成28年11月14日(港区立御成門中学校)

《テーマ》本物との出会い

《講話のねらい》

バーチャルリアリティ、仮想現実の中で生活する時間が増えてきている。中学生の家庭での過ごし方を見てもゲームの中に自分を投影してみたり、パソコンの画像を通して多くのことを学んだりしている。これらのことをすべて否定するつもりはない

が、このような時代だからこそ「本物」と出会い「本物」と接することで、多くの体験をしたり、感性を磨いたりしてほしい。そして自身の成長に結び付けてほしい。

【講話】

2週間以上たってしまいましたが、合唱コンクールは本当に素晴らしいものでした。練習ではいろいろな壁にぶつかったと聞いています。しかし、本番では素晴らしい歌声、態度で多くの感動を与えてくれました。来賓からも「感動した、素晴らしかった」との言葉をたくさんいただきました。

その後の、吹奏楽部、ダンス部、英語スピーチ、海外派遣報告、閉会式までどこに出しても恥ずかしくないものばかりでした。御成門中生の力を大いに示してくれた1日でした。ありがとうございました。

さて、今日は「本物との出会い」というテーマで話をします。合唱コンのあと、世界的なオペラ歌手のジョン・ヌッツォさんのミニコンサートがありました。まさにプロ中のプロの歌声を間近で聞かせてもらいました。心が大きく震えたのは私だけではなくはずです。中学生というこれから大人に向かおうとするときに、「本当に良いもの」や「本物」と出会うことによって、生き方さえも変えることができると言われていています。そこで、「全国に誇れる御成門中生」を育てていく中で、私は「本物との出会い」をできるだけ多く取り入れたいと考えています。

先週の木曜日に、2年生と鎌倉校外学習に行ってきました。全体としてとても立派な校外学習でした。集団行動など「さすが御成門中生」と思えることがたくさんありました。一方、今回の校外学習には「本物との出会い」がたくさんあったことも忘れてはなりません。君たちも知っている通り、今から800年以上前に鎌倉に幕府が置かれました。それ以来綿々と続く歴史が寺社・仏閣などに残されているのです。まさに「本物との出会い」を経験してきた

のです。3年生の修学旅行でも同様なことがあったはず、1年生の移動教室では本物の自然と出会ったはずです。

君たちが生活している港区には、現代の日本を代表する先進的な文化があるだけでなく、歴史的に価値ある場所が数えきれないほどたくさんあります。例を挙げれば、御成門交差点のところの石碑には「日本の初等教育発祥の地」と書かれています。まさに、日本の教育はこの地から始まっているのです。「本物」です。ぜひ、君たちも多くの「本物」を探してください。見つけてください。そして、私をはじめ先生方に教えてください。待っています。

最後に、「本物との出会い」についての新たなお知らせです。11月29日（火）午後、「オリンピック・パラリンピック教育」の一環として、リオデジャネイロオリンピックのダリストの方をお招きします。水泳200メートル平泳ぎ金メダリストの金藤理恵さんです。まさに「本物」の方の話が聞けますので、楽しみにしててください。

(7) 平成29年5月8日（港区立御成門中学校）

《テーマ》授業はスリーステップ

《講話のねらい》

ゴールデンウィーク明け、ちょうど生徒たちも新しい学年の生活に慣れてきた頃である。中には授業について行けない生徒も出てくる。このようなときに、「授業中の学習の仕方」や「家庭での学習の仕方」について具体的に考えさせることにより、学習のつまずきを少しでも減らしたい。そして、自立した学習者としての生徒を育てたい。

【講話】

おはようございます。GW（大型連休）が終わりました。ちょっとがっかりしている人もいるかもしれませんが、君たちがこのように元気な姿が集まってくれれば、何かとてもうれしくなります。

さて、新しい学年になって1か月がたちました。1年生も中学校の授業に、2、3年生はそれぞれの学

級に、少しずつ慣れてきたのではないのでしょうか。今日は、そのような君たちに、「授業の基本について」話したいと思います。私は、教員時代、この時期になると「先生、授業の受け方がわかりません」「勉強の仕方がわかりません」という声をよく聞いたものです。君たちはどうですか。似たような考えをもっていたり、今までにそんな疑問をもったりしたことはありませんか。

そこで、私から「授業はスリーステップ」というキーワードでお話をします。1番め、「先生の説明をしっかりと聞く」、2番めに「自分で考えて課題に挑戦する」そして、3番めに「他の人と疑問点などを情報交換する」。授業では、このスリーステップを大事にしてみてください。これが授業を受ける基本です。

もし、学習につまずいたなと思ったら、先ほど言ったスリーステップについて自分に問いかけてみてください。1つめ、「先生の説明をしっかりと聞かなかったのではないか?」、2つめ、「自分で考えて課題に挑戦しなかったのではないか?」、そして3つめ、「他の人と相談したり話し合ったりしなかったのではないか?」。もし、思い当たることがあれば、その部分から直していくとよいでしょう。

この考えは、家庭学習にも応用できるかもしれませんね。「先生の説明をしっかりと聞く」の代わりに、「教科書などをしっかりと読む」、2つめに「自分で考えて課題に挑戦する」これは授業と全く同じです。3つめは「自分の中でほかの考えもあるのではないかと考える」。きっと、ただ物事を暗記するだけのいわゆる「浅い学習」から、物事を様々に考える「深い学習」につなげることができそうです。

中間考査も近づいています。「授業はスリーステップ」をいつでも思い出してみてください。

(8) 平成30年3月5日（港区立御成門中学校）

《テーマ》東京平和の日・東日本大震災

《講話のねらい》

3月10日の東京大空襲、3月11日の東日本大震災という過去に起きた大きな出来事は決して忘れてはならない。3月上旬のこの時期に、犠牲になられた方々のご冥福を祈るとともに、これらを風化させてはならないということ伝えたい。そして、これらの出来事から得た教訓を次の世代へ引き継いでいく大切さについて考えさせたい。

【講話】

3・11が近づいてきました。平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災から7年になります。被災地では、未だに行方不明の方々がいらっしゃいます。復興に向けての取り組みも全力で行われています。私たちはそのことを決して忘れてはいけません。当時、君たちは小学校入学前から2年生でした。小さな子供だったので、大きな揺れがあったこと、怖かったことなどは覚えているとは思いますが、被災の様子や支援の様子などの詳細はよくわからないと思います。ぜひ、この時期にTVなどの報道や様々な情報から、東日本大震災について多くを学び、多くの教訓を得てください。

実は、私は昨年の夏、東日本大震災で大きな被害を受けた3県（福島、宮城、岩手）の学校を訪問してきました。その話を中心にします。

*特別報道写真集「平成の三陸大津波」を見せる

これは、岩手県の新聞社が作成した写真集です。まず、私が訪問した町の一つである宮古市の写真を見てみましょう。

*数ページ見せる

このような凄まじい大震災のあと、避難所となった地元の学校は、全国からの支援物資であふれかえったそうです。そのような状況の中、中学生たちは、「私たちにできることは何だろう？」と考え、その思いを行動に移したそうです。「元氣と勇氣を一緒に届けよう」を合言葉に支援物資を地域の方々に届ける活動を行いました。また、届いている物資を紹介するピラを配布し、必要なものを持って帰っ

てもらった活動もしました。吹奏楽部は避難所でミニコンサートを開き、野球部員は毎日避難所の清掃活動を行ったそうです。そして、「がんばっていこう」という思いを後輩に伝えるとともに、後輩たちがいつでも前を向いて明るく進んでいくことができる「道標」を残したいという思いで復興ソング「未来へ」を作成したのです。学校訪問したときに、全校生徒がその歌を聞かせてくれました。涙があふれてきました。

東京でもボランティア活動に取り組んだ生徒たちがいます。御成門中から近い都立三田高校、芝商業高校の生徒たちは、自分たちも帰宅できなかったのですが、学校に避難してきた人々のために、ボランティア活動をしました。毛布やマット、飲料水を配ったり、食事の用意や配膳をしたりしたそうです。また、中学校でもボランティアをしたところがあります。港区ではお台場学園港陽中の生徒たちが備蓄倉庫から毛布等を取り出したり、炊き出しを手伝ったりしました。

ここでは、津波の被害にあった地域・学校の話をしてきましたが、原子力発電所の事故の影響で、未だに帰宅すら許されない地域があります。TV等では、東日本大震災については、3・11に近づいた時くらいしか報道されなくなってきましたが、現地では、復興への道は、まだこれからなのです。時間の経過によってこの災害を風化させてはなりません。君たち若い世代が、ぜひ多くの人たちに伝えてほしいと思います。

*空襲の写真を見せる

今日はもう一つお話をします。これは、地震の後の写真ではありません。73年前の3月10日、第2次世界大戦の末期、アメリカ軍の空襲によって破壊された東京の写真です。この空襲で、墨田区・江東区・台東区を中心にした下町地区で約10万人の方々の尊い命が奪われました。この港区の新橋・虎の門、愛宕地区も、同じような状況だったと聞きます。その日を忘れてはいけぬ、戦争を絶対にして

はいけないという思いを込めて、3月10日は、「東京都平和の日」と呼ばれています。

君たちも知っているとおおり、戦争は絶対にあってはなりません。戦争によって多くの命が奪われることがあってはなりません。先ほど話したように、私たちの住む下町で、約70年前、戦争によって多くの人々の命が奪われたのです。私たちは「東京都平和の日」をきっかけに、これからも世界の平和についてぜひ考えていきましょう。

約70年前の3月10日、7年前の3月11日、罪もない多くの人々がお亡くなりになりました。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りして、3月10日の3年生を送る会にて黙とうをささげたいと思います。

4. まとめとして

どの学校でも行われている朝礼であり、校長講話ではあるが、私なりに工夫したことがある。それは、校長講話を聞いた後に「200字の作文を書く」という取組である。朝礼の場所から教室に戻り、担

任を待つまでの間にわずかな時間ができてしまう。学級委員に原稿用紙を配ってもらい「5分間」で校長講話を聞いた後に自分なりに考えたことや感じたことを書いてもらった。最初のうちは「完璧に書き上げる必要はない、途中まででもよい」とした。まずは、講話をしっかりと聞く習慣を付けさせたかったのである。

私は、できる限り生徒たちの作文を読むようにした。何ヶ月かしてわかったことがある。それは、時間内に書き上げることができるようになった生徒が増えたことである。これは積み重ねていけば当然の結果かも知れない。しかし、それ以上に変化してきたことがある。自分の思いや考えを表現できるようになった生徒が増えていったのである。想定をはるかに上回る内容が書かれることもしばしばあった。生徒の力の素晴らしさを何度も感じることもできた。私の学校経営の新たなヒントをもらったこともあった。

私なりに朝礼での校長講話について触れてきた。これを読まれた校長先生方や学校関係の皆様への何らかの参考になれば幸いである。